

研究論文

友人関係の持ち方から考える  
現代青年の LINE メッセージへの反応

白 畑 眞 緑<sup>\*1</sup> 須 藤 春 佳<sup>\*2</sup>

Characteristics of Friendship Based on Response of Friends of Adolescents  
to Their LINE Application Messages

SHIRAHATA Minori<sup>\*1</sup> SUDO Haruka<sup>\*2</sup>

---

<sup>\*1</sup> 神戸女学院大学大学院 人間科学研究科 博士前期課程修了生

<sup>\*2</sup> 神戸女学院大学 心理学部 心理学科 教授

連絡先：須藤春佳 sudo@mail.kobe-c.ac.jp

## 要 旨

本研究では、青年期における友人関係の持ち方と、友人間での LINE のやりとりの特徴との関連を検討した。調査では友人間での LINE のやりとり場面を3つ設定し、メッセージの送り手として友人の返信が無いことが気になり始める時点で、生起するネガティブ感情と想起内容を尋ね、受け手側の傾向も検討した。見出された友人関係群の LINE のやりとりの特徴として、「気遣い・群れ関係群」は自身が期待する速さで友人から返信が無いとネガティブ感情を感じ、相手の反応に捉われやすい傾向があり、青年前期の特徴に近いと考えられた。友人と関係を築くことに消極的な「自己閉鎖群」は、相手の反応に影響されにくいことが窺えた。「快活的内面関係群」は、予定を確認する場面で友人から返信が無いとネガティブ感情を抱く傾向にあり、受け手条件では相手の様子を押し量り対応を考える人が多かった。最後に、本研究の結果が心理臨床実践にどのように応用可能かを考察した。

**キーワード：**青年期、友人関係、LINE 利用、ネガティブ感情

## Abstract

In this study, using a survey by setting scenes of LINE application, we obtained data regarding adolescents feeling uneasy about the lack of replies from their friends, their negative feelings, and thoughts at that time point to explore the relationship between the feature of interaction on LINE and characteristics of friendship in them by forming three groups. Results showed that the group being careful to not hurt or be hurt by their friends felt negative feelings on not receiving a reply at the expected time point. Adolescents who avoided an emotionally close friendship was less affected by their friends' reaction. Whereas, adolescents have tend to show true feeling tended to express dissatisfaction at the lack of replies from friends and many of the recipient of message entered into friends situation to response. Finally we discussed the application of this study to practice in clinical situations.

**Keywords:** adolescents, friendship, LINE application, negative feelings

## 1 問題と目的

スマートフォンの普及に伴い、social networking service（以下、SNS）の利用が拡大し、友人関係の形態が変化しつつある。なかでも LINE はチャット形式でメッセージの手軽な送受信を可能にした。多くの青年たちが SNS を用いて友人関係を維持している中、LINE は、友人との連絡手段として用いられるだけでなく、友人間での情緒的交流の一部を担っていると言えるだろう。若本（2015）は、LINE の魅力をいつでも友人との繋がりが実感でき、スタンプ等で楽しくコミュニケーションがとれる点であると述べ、一方で場所や時間に関係なく連絡できることが侵襲的に感じられ心理的負荷がかかることを指摘する。時岡ら（2017）は、LINE は対面よりも緊張が下がりやすい一方で、相手との齟齬や攻撃性が増すと言う（p. 85）。以上から、LINE は常時友人と繋がっている実感と利便性があると同時に、相手と齟齬が生じやすいと考えられる。時に LINE の利用においては、青年が友人と繋がっている安心感を得るだけでなく、友人からの返信の速さや内容によって気持ちが左右されることもあると考えられる。本研究では、LINE のやりとりにおいて青年が友人から返信を待つ間に思うこと、また自身が返信するまでの間に思うことに着目することで、LINE 利用における現代青年の友人関係の捉え方の特徴とその理解に繋がれると考えた。

ところで、LINE のやりとりには、メッセージを開封後に「既読」と表示される既読機能を巡るやりとりも含まれる。受信者がメッセージを読んでいるが返信が無いことは「既読無視」、メッセージを開けないまま置いておくことは「未読無視」とされ、メッセージに反応しないことは「無視」という意味合いを持つようになった。田附ら（2019）の LINE の既読状態への葛藤に関する研究では、青年前期は既読無視による葛藤場面を被害的に受け取るよりも、ただ漠然と戸惑いや不安を抱く傾向にあり、青年後期では相手から返信が無い場合には相手の気持ちの動きを想像できるようになると報告している（p. 25）。さらに、LINE の友だちとグループが少ない人ほど、ネガティブ感情が生じることは少ないが、既読状態を待つ際には早い時点でネガティブ感情が生じやすいことも報告されている（加藤ら、2020, p. 4）。また小島（2016）は、拒否回避欲求が強い人は、相手との関係を断ち切ることが難しく、自分から LINE メッセージを発信しないまでも相手からのメッセージには応答を続け消極的な友人関係を維持し続ける傾向があると述べる（p. 63）。従って、LINE の返信に気を遣う傾向は、青年期の発達段階や友人関係の持ち方によって異なると考えられる。特に友人関係の維持に LINE 利用を重視する者ほど、期待する速さやタイミングで反応が得られないとネガティブ感情を抱く傾向にあるのではないかと考えた。以上、先行研究では LINE 利用と青年の心情との関連は、LINE のやりとりの発達の変化（田附ら、2019）や、返信を待つ間のネガティブ感情（加藤ら、2019, 2020）から検討されており、LINE 利用の特徴には対面での友人関係のあり方が反映されるとの報告もあるが（中山、2018；西村、2020）、返信の速さや有無に対する青年たちの反応の質的調査は十分とは言えない。そこで、本研究では友人関係の持ち方による LINE 上のやりと

りの特徴を、返信の速さや反応の有無を巡りどのように感じるかを調査し、量的な分析と質的な分析を併せて検討することとした。

青年期の友人関係の特徴について、岡田（2011, p.18）は、友人から否定的評価を受けて自身が傷つくリスクを最小限にするために、互いに傷つかないよう気を遣いながら円滑な関係を維持していると述べ、友人関係のあり方を次のように整理している。1）互いに傷つけられる・傷つけることを避け、友人に気を遣いながら円滑な友人関係を維持する「気遣い・群れ関係群」、2）情緒的に近い関係を回避する「関係回避群」、この2群を現代青年の友人関係の特徴と指摘し、3）傷つけられることを気にせず自己開示する関係を築こうとする「内面関係群」は、従来から青年期に築かれるとされてきた、自分の内面を開示する深い友人関係を築く群であると述べ、以上の3群を見出した。本研究ではこの3群の特徴によるLINE利用のあり方の違いを検討する。なお、友人関係とLINE上のやりとりの特徴との関連を扱った研究では、架空の場面を設定し、その中の登場人物として反応を尋ねる場面想定法をとるものがある（田附ら, 2019；須藤, 2019）。これらは回答者の反応を通して、回答者自身の行動傾向や志向性を推測する手法であり、心理検査の投影法の考え方に準じるものでもある。本研究でもこの考え方を基盤に、想定された場面の反応を通して回答者自身の傾向性を推測する形で、回答者の友人関係における行動・反応傾向について示唆が得られると考えた。

本研究ではまず、メッセージの送り手条件として、①返信が無いことが気になり始める時間、②①の時点で感じるネガティブ感情、③①の時点で想起する内容について検討を行う。ここで①が短い人ほど返信の速さを気にする傾向があるとした。送り手条件では「未読場面」と「既読場面」を設定し、両場面の反応を比較する。「未読場面」は、自身が送ったメッセージを相手が確認したのかわからない状態を指し、相手の状況や様子がわかりづらい場面で、返信が無いことに対する反応を抽出できると考えた。「既読場面」は、相手が読んだことを送り手側がわかっている状態で返信が無い場合に、送り手側に生じる反応を抽出できると考えた。次に、メッセージの受け手条件では、④相手からのメッセージを確認後、すぐに返信するか否か、⑤④の時点で想起される内容を尋ね、相手には未読状態が示され自身はメッセージを確認している場合において、自身がとる行動や反応を検討することとした。以上の送り手・受け手条件を検討することで、友人とLINEでやりとりする際の青年の心情を具体的に知ることができると考えた。ここで前提として、状況により友人間で期待されるメッセージへの返信の速さには違いがあると想定され、返信に時間的な制約がある場合は速い返信を意識し、相談等の返信内容に熟考が求められる場合は前者に比べて返信が遅くなる傾向があると推測される。本研究ではそのような状況の要因を踏まえた上で、友人関係（岡田, 2011）の持ち方による、LINEで相手に期待する返信の速さと、返信が無い場合の気持ち、自身の返信への対応の特徴について、次のような仮説を立て検証を行う。気遣い・群れ関係群は、友人に悪い印象を与えないようLINE上でも返信の速さや送る内容に気を遣うと同時に、場面を問わず、相手から速く返信が無いと、相手を困らせたのではないかと相手の気持ちを探ろうとするのではないかと考えた。従って「**仮説1**：気遣い・群れ関係群は、自身がメッセージの送り手の場合、相手から速く返信が無いことを気にし、返信が無いことが気になり始める時点でネガティブ感情を

抱く。受け手の場合は、返信の速さに気を遣い、速く返信しようとする」とした。関係回避群は、自身が傷つくことを回避し相手が傷つくことに配慮しない傾向から、LINE 上でも返信の速さに気を遣わないのではないかと考えた。従って「**仮説 2**：関係回避群は、自身がメッセージの送り手でも受け手でも、場面を問わず、返信の速さは気にしない。送り手では、相手から返信が無いことが気になる傾向が低く、ネガティブ感情を感じにくい傾向にある」とした。最後に、内面関係群は、自身が傷つくことを厭わず親密な関係を築くため、返信の速さが相手との関係に影響すると考える傾向は低く、状況や内容で返信の速さが変わるのではないかと考えた。従って「**仮説 3**：内面関係群は、送り手でも受け手でも、時間的制約がある等の状況によって、返信の速さや有無を気にする傾向が変わる。返信が無いことが気になり始める時点で感じるネガティブ感情は、メッセージの文脈により傾向が異なる」とした。なお、各場面で想起される内容については仮説を立てず、各群の傾向を探索的に検討することとした。

## 2 方 法

### 2-1 予備調査

① **LINE 場面のシナリオ作成**：2020年1月に、女子大学生51名（平均年齢20.20歳、 $SD = .722$ ）を対象に、最近1ヶ月の友人とのLINE上でのやりとりを、「日常の出来事・報告に関するやりとり」「用事に関するやりとり」「相談に関するやりとり」「その他」に分けて、やりとりする頻度が高い順に並べてもらい、各項目の具体的な内容を自由記述で回答を求めた。予備調査は匿名での回答とし、表紙に回答中に体調不良が起こった場合に中断できること、集めた回答の取り扱いには十分に配慮することを明記し、同意のチェック欄を設け、回答を依頼した。予備調査で頻度が高いと回答されたやりとりの内容を参考に、筆者が本調査で使用する次の3つのシナリオ場面を作成した。（1）約束していた予定について尋ねる「予定」場面、（2）試験で疲れたという自身の内面を吐露する「つぶやき」場面、（3）恋人のことを相談しようとする「相談」場面、以上の性質の異なる3場面を作成した。

本調査では、全場面で同性の親しい友人一人にメッセージを送る場面（送り手条件）と自身が受け取る場面（受け手条件）の両方に回答を求めた。各場面の状況から、返信に期待される速度は、（1）「予定」は約束を確認する目的のため速い返信が求められ、（2）「つぶやき」は受信者の状況や受け止めに影響を受ける可能性が高く、（3）「相談」は回答に時間がかかる場合があることが想定された。

② **ネガティブ感情の検討**：LINE 上で相手からの返信が無い場合に感じるネガティブ感情については未だ先行研究は数少ない。加藤ら（2020）は、LINE のグループトークで半日以上たって半数以上から返信が得られない際に、送信者側に生じるネガティブ感情として、「不安」「悲しみ」「怒り」「罪悪感」を取り上げ検討した。本研究ではそれ以外の感情についても取り上げることを目的とし、1対1のLINE 場面で、友人から返信が無いことが気になり始めてから生じる感情について、臨床心理学を専攻する大学院生4名を対象に想定してもらった。返信が無いことが気になり始めるタイミングには個人差があると考えられ、生じる感情にも名づけることが難しい漠然としたものから、明確な感情まで測定できるように検討を行った。その結

果、本研究ではネガティブ感情として「もやもやする」「驚き」「戸惑い」「心配な」「不安な」「いらいらする」を採用し、実際にこれらを感じるかどうかについて、探索的に検討することとした。「不安」以外は加藤ら（2020）に含まれていないが、悲しみ・怒り・罪悪感のような明確なネガティブ感情ではないものの、戸惑いや苛立ち、心配や違和感なども相手の返信を待つ場面で感じうるネガティブ感情としてこの6つを採用した。

## 2-2 本調査

①**調査対象者・倫理的配慮**：大学生・大学院生160名（男性47名、女性113名、平均年齢20.24歳、 $SD = 1.61$ ）を対象に、オンライン上で調査を実施した。調査時期は2021年4月～2022年6月であった。回答時に体調不良となった場合は辞退できること、個人は特定されず、個人情報の保護に配慮していることを明記し、同意のチェック欄を設け、回答を依頼した。本研究は筆者が所属する機関の倫理委員会での書類審査を受け、承認された。

②**質問紙の構成**：はじめに年齢、性別、学年を尋ね、質問内容に回答を求めた。

i) 送り手条件（図1～6）：予備調査をもとに作成した3つのシナリオ場面それぞれに「未読場面」と「既読場面」を設定し、以下の質問を尋ねた。①友人から返信が無いことが気にな



図1. 送り手側「予定」の未読場面



図2. 送り手側「予定」の既読場面

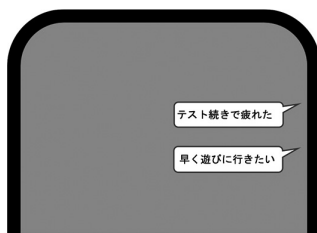


図3. 送り手側「つぶやき」の未読場面

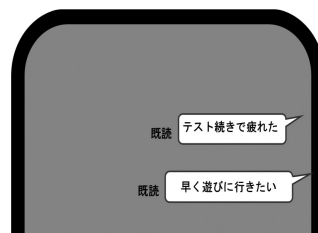


図4. 送り手側「つぶやき」の既読場面

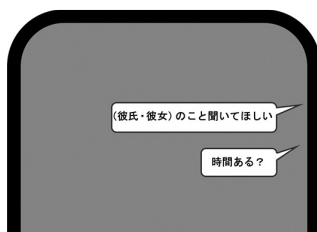


図5. 送り手側「相談」の未読場面

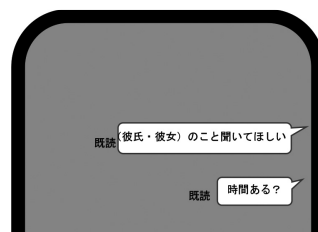


図6. 送り手側「相談」の既読場面





図7. 受け手側「予定」場面



図8. 受け手側「つぶやき」場面



図9. 受け手側「相談」場面

り始める時間を「1. 30分以内」「2. 1～2時間以内」「3. その日のうち」「4. 2、3日以内」「5. 特に気にならない」の中から1つ選んでもらい、②①で「特に気にならない」と回答した人以外に、6つのネガティブ感情をどの程度感じるか、5段階で答えてもらった後、③②のネガティブ感情が生じる時に想起されることを自由記述で求めた。

ii) 受け手条件 (図7～9): メッセージを確認した時に、返信について感じることを、「1. 返信しようと思わない」「2. 返信できるときに返そうと思う」「3. すぐに返信しようと思う」「4. とりあえず早く返信しなければと思う」「5. その他」の中から1つ選び、そのように感じる理由を自由記述で回答を求めた。

③友人関係尺度 (岡田, 2007): 自分の内面を開示するような関わりを避ける「自己閉鎖」、相手から心理的に傷つけられないように振る舞う「傷つけられることの回避」、相手を傷つけないように気を遣う関わりをする「傷つけることの回避」、楽しく場の良い雰囲気を維持しようとする「快活的関係」の4つの下位尺度で構成され、6件法で回答を求めた。

### 3 結果

#### 3-1 尺度の分析とクラスタ分析による友人関係の分類について

友人関係尺度 (岡田, 2007) は、作成されて15年以上が経過しており、本研究の調査対象者の傾向と因子構造の再確認を行う目的で因子分析を行った (主因子法・プロマックス回転)。天井効果のある2項目を削除後、スクリープロット基準で4因子が妥当と判断し、因子負荷量が.35未満の2項目を削除、最終的に31項目が残った (表1)。複数の因子に一定の負荷量を示す項目があったが、今回は因子構造の確認と因子得点の算出が目的 (小塩, 2017) のため、削除せずに採用した。その結果、「自己閉鎖」 (岡田, 2007) を構成した「自分の内面に踏み込まれないよう気をつける」「友だちの心の支えになろうとする (逆転)」が「傷つけられることの回避」因子へ移動、「相手の世界に口出ししない」「お互いのプライバシーに立ち入らない」等、相手の内面に踏み込まない内容の4項目が「傷つけることの回避」因子へ移動した。ここで、互いの考えに意見することが「傷つける／傷つけられる」と考えられていることがわかる。また、岡田 (2007) で「傷つけることの回避」を構成した「友だちから無神経な人間だと思われられないように気をつける」が、「傷つけられることの回避」因子へと移動した。当初は自身が“無神経”であるために相手を傷つけるという意味であったが、今回は自身が周囲に“無神経”

表 1. 友人関係尺度による因子分析結果

友人関係尺度	因子			
	I	II	III	IV
<b>「傷つけられることの回避」(<math>\alpha = .847</math>)</b>				
2-29. 友だちからどう見られているか気にする。	.761	-.117	-.140	.063
2-22. 仲間の前で恥をかかないよう気をつける。	.744	.081	-.140	-.076
2-23. 友だちからバカにされないよう気をつける。	.723	.056	-.286	-.111
2-33. 友だちをがっかりさせないように気をつける。	.650	-.090	.034	.186
2-31. 友だちから無神経な人間だと思われまいやうに気をつける。	.641	.113	.113	.065
2-13. 友だちから傷つけられないやうにふるまう。	.622	.097	.026	-.102
2- 2. 友だちから「つまらない人」と思われまいやうに気をつける。	.603	.092	-.072	.306
2-17. 友だちと意見が対立しないやうに気をつける。	.554	.160	.148	-.002
Q2_20 友だちの心の支えになろうとする。*	-.425	.360	-.134	-.063
2-14. 自分の内面に踏み込まれないやうに気をつける。	.397	.307	.021	-.204
<b>「自己閉鎖」(<math>\alpha = .799</math>)</b>				
Q2_35 悩み事を相談する。*	-.126	.787	-.029	.177
Q2_26 必要に応じて友だちを頼りにする。*	-.044	.743	-.078	.220
Q2_25 落ち込んだとき話を聞いてもらう。*	-.334	.690	.115	.154
Q2_ 1 自分の心をうち明けて話す。*	.108	.547	.002	.017
2-28. 本当の気持ちは話さない。	.247	.540	.041	-.059
2-30. 自分が落ち込んだ姿を友だちに見せまいやうにする。	.268	.501	.299	-.103
2-19. 友だちにグチを言わないやうにする。	.104	.433	.233	.101
2- 9. 浅い付き合いにとどめる。	.069	.417	-.091	-.265
2-10. あたりさわりのない会話ですませる。	.297	.415	-.089	-.175
<b>「傷つけることの回避」(<math>\alpha = .779</math>)</b>				
2- 7. 相手の世界に口出ししない。	-.347	.001	.691	-.043
2-21. 友だちの内面に土足で踏み込まないやうにする。	.068	.059	.670	-.176
2- 4. 相手に自分の意見を押しつけないやうにする。	-.165	.023	.648	-.109
2- 8. 相手の言うことに口をはさまない。	.056	.061	.550	-.054
2- 5. 相手に優しくするやう心がける。	.188	-.183	.488	.013
2-16. お互いのプライバシーに立ち入らない。	-.017	.236	.470	-.168
2- 3. 相手に甘えすぎない。	-.081	.405	.464	.126
2- 6. 相手の気持ちに気をつかう。	.262	-.193	.450	.101
2-34. 友だちを傷つけないやうにする。	.215	-.195	.447	.073
<b>「快活的關係」(<math>\alpha = .713</math>)</b>				
2-11. ウケるやうなことをする。	.158	.152	-.181	.804
2-15. 冗談を言って相手を笑わせる。	-.051	.157	-.133	.780
2-27. 楽しい雰囲気になるやうふるまう。	.156	-.186	.247	.401
因子間相関				
—	—	-.057	.539	.093
		—	-.055	-.324
			—	.180
				—

\*は逆転項目。網掛け部分は岡田(2007)と比べた際に、移動がみられた項目。( )内は $\alpha$ 係数を示す。



表 2. 友人関係尺度（因子得点）のクラスタ分析における多重比較の結果

クラスタ	1 快活的内面関係群 ( <i>N</i> = 49)	2 気遣い・群れ関係群 ( <i>N</i> = 64)	3 自己閉鎖群 ( <i>N</i> = 47)	<i>F</i> 値	多重比較
<u>友人関係尺度</u>					
傷つけられることの回避	-.275(.714)	.758(.559)	-.764(.823)	70.29***	3 < 1 < 2
自己閉鎖	-.325(.689)	-.25(.905)	.679(.854)	22.45***	1, 2 < 3
傷つけることの回避	-.551(.566)	.812(.524)	-.531(.833)	85.61***	1, 3 < 2
快活的関係	.429(.689)	.205(.812)	-.726(.758)	31.56***	3 < 1, 2

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ , 平均値と ( ) 内の数値は *SD*

だと思われて傷つくことを恐れるという意味に理解されていると考えられる。従って、対象者が友人と率直に意見し合うことが無神経で傷つけ合うことだと恐れている傾向が窺える。以上の分析結果から、因子構造は岡田（2007）とは異なるものとなり、今回抽出された4因子を用いて調査対象者の友人関係の特徴を検討することとした。そのため岡田（2011）と同じ友人関係群の特徴から検討することは難しいと判断し、4因子の因子得点を元に、ward法によるクラスタ分析を行い、クラスタ数が3の場合に、各群が同程度の人数に分かれたため、3群を抽出した。各群を独立変数、因子得点を従属変数とする対応のない分散分析（Tukeyの多重比較）を行い、各群の特徴を検討した（表2）。性差の検討について、今回は調査期間内で男性の回答数が少なく、男女別に群分けするには人数比の点から検定が難しくなることを考慮し、男女を分けずに群を作成した。

第1クラスタ（「快活的関係」が相対的に高く、「傷つけられることの回避」は中程度）は、場の楽しさや良い雰囲気を維持しつつ、友人に自身の本音を見せる傾向にあることから、「快活的内面関係群」と命名した。岡田（2011）の「内面関係群」は、従来の互いに理解し合おうとする親密な関係を築く傾向にあったが、「快活的内面関係群」は、友人間の楽しい雰囲気を重視し、傷つけられないよう配慮する傾向はやや低く、自身の本音を見せる形で友人関係を築くと考えられる。第2クラスタ（「傷つけられることの回避」が最も高く、「傷つけることの回避」「快活的関係」が相対的に高い）は、楽しく自他ともに傷つかないように気を遣う群と考え、「気遣い・群れ関係群」（岡田，2011）を採用した。第3クラスタ（「自己閉鎖」が最も高く、「傷つけられることの回避」が低い）は、友人に対して本音を見せず防衛的な傾向を持つと考えられる。岡田（2011）の「関係回避群」とは異なり「傷つけられることの回避」が低く、傷つけられることを恐れる必要がないほどに他者に対して閉ざしており、友人関係から退く傾向を持つと推測され、「自己閉鎖群」と命名した。

### 3-2 送り手条件の検討

#### ①返信が無いことが気になり始める時間

友人関係群による違いを検討したところ、「予定」「つぶやき」「相談」の全場面で「1. 30分以内」「2. 1～2時間以内」の項目の度数が0～5未満であったため、意味の近いカテゴリに統合した（「1. 30分以内」「2. 1～2時間以内」「3. その日のうち」→「3. その日のうち」）。カテゴリごとの出現度数の偏りを検討するため、 $\chi^2$ 二乗検定を行った結果、「予定」の未読・既読の両場面（ $\chi^2 = 5.67$ ,  $n.s.$ ,  $\chi^2 = 5.84$ ,  $n.s.$ ）、「つぶやき」の未読・既読の両場面（ $\chi^2 = 2.45$ ,  $n.s.$ ,  $\chi^2 = 8.70$ ,  $n.s.$ ）に有意差はなかった。「相談」の未読場面にのみ、有意差がみられ（ $\chi^2 = 10.84$ ,  $p < .05$ ）、残差分析を行った（表3）。「その日のうち」では、気遣い・群れ関係群の出現度数が多く、自己閉鎖群は少なかった。「特に気にならない」は、気遣い・群れ関係群が少なく、自己閉鎖群が多かった。

表3. 「相談」未読場面：返信が無いことが気になる時間

相談（未読）	友人関係群			合計
	快活的内面関係群	気遣い・群れ関係群	自己閉鎖群	
その日のうち	19	32(+)	13(-)	64
2、3日以内	20	23	16	59
特に気にならない	10	9(-)	18(+)	37
合計	49	64	47	160

5%水準で有意に多少が示されたセルを+、-で示す。

#### ②返信が無いことが気になり始める時点でのネガティブ感情

全場面で、返信が無いことが「特に気にならない」と回答した人以外を対象に、友人から返信が無いことが気になり始める時点で生じるネガティブ感情6項目への回答を求めた。ネガティブ感情を従属変数として、友人関係群ごとに一要因の分散分析を行った。まず、「予定」場面では未読・既読の両場面で有意差があり、多重比較（TukeyのHSD検定）の結果（表4、5）、未読場面では気遣い・群れ関係群が自己閉鎖群よりも「戸惑い」「心配な」が高く、自己閉鎖群の「不安な」「いらいらする」が最も低く、「もやもやする」では気遣い・群れ関係群が最も高かった。既読場面では、「心配な」「不安な」は自己閉鎖群が最も低く、気遣い・群れ関係群が自己閉鎖群より「もやもやする」が高かった。次に「つぶやき」場面では、既読場面で有意差がみられ、多重比較（TukeyのHSD検定）の結果（表6）、気遣い・群れ関係群が自己閉鎖群より「もやもやする」「戸惑い」が高く、「不安な」「いらいらする」は、自己閉鎖群が快活的内面関係群より低かった。「相談」場面では未読・既読の両場面で有意差はなかった。

表4. 「予定」未読場面：ネガティブ感情と友人関係群との分散分析の結果

	1 快活の内面関係群 ( <i>N</i> = 49)	2 気遣い・群れ関係群 ( <i>N</i> = 63)	3 自己閉鎖群 ( <i>N</i> = 45)	<i>F</i> 値	<i>r</i>	多重比較
ネガティブ感情						
もやもやする	3.673(1.231)	4.174(1.056)	3.644(1.384)	3.413*	.91	1,3 < 2 <sup>†</sup>
驚き	2.204(1.224)	2.048(1.237)	1.800(1.160)	1.322	.98	<i>n. s.</i>
戸惑い	3.204(1.429)	3.683(1.175)	2.956(1.461)	4.137*	.95	3 < 2
心配な	3.449(1.459)	3.841(1.247)	2.956(1.414)	5.540**	.97	3 < 2
不安な	3.984(1.143)	3.984(1.143)	2.867(1.307)	11.195***	.99	3 < 1, 2
いらいらする	2.918(1.397)	2.889(1.369)	2.222(1.347)	3.947*	.94	3 < 1, 2

<sup>†</sup>*p* < .10, \**p* < .05, \*\**p* < .01, \*\*\**p* < .001, 平均値と ( ) 内の数値は *SD*

表5. 「予定」既読場面：ネガティブ感情と友人関係群との分散分析の結果

	1 快活の内面関係群 ( <i>N</i> = 45)	2 気遣い・群れ関係群 ( <i>N</i> = 61)	3 自己閉鎖群 ( <i>N</i> = 42)	<i>F</i> 値	<i>r</i>	多重比較
ネガティブ感情						
もやもやする	4.000(1.297)	4.262(1.031)	3.523(1.596)	4.073*	.94	3 < 2
驚き	2.822(1.481)	2.951(1.465)	2.426(1.364)	1.684	.77	<i>n. s.</i>
戸惑い	3.822(1.284)	3.836(1.306)	3.357(1.411)	1.903	.80	<i>n. s.</i>
心配な	3.511(1.359)	3.672(1.363)	2.523(1.486)	9.155***	.99	3 < 1, 2
不安な	3.622(1.353)	3.951(1.231)	2.881(1.565)	7.690**	.98	3 < 1, 2
いらいらする	3.200(1.486)	3.1311(1.466)	2.738(1.449)	1.274	.67	<i>n. s.</i>

\**p* < .05, \*\**p* < .01, \*\*\**p* < .001, 平均値と ( ) 内の数値は *SD*

表6. 「つぶやき」既読場面：ネガティブ感情と友人関係群との分散分析の結果

	1 快活の内面関係群 ( <i>N</i> = 31)	2 気遣い・群れ関係群 ( <i>N</i> = 44)	3 自己閉鎖群 ( <i>N</i> = 24)	<i>F</i> 値	<i>r</i>	多重比較
ネガティブ感情						
もやもやする	4.065(.964)	4.227(.831)	3.583(1.316)	3.216*	.92	3 < 2
驚き	2.742(1.460)	2.318(1.325)	2.500(1.351)	.864	.52	<i>n. s.</i>
戸惑い	3.516(1.338)	3.523(1.320)	2.667(1.308)	3.782*	.94	3 < 2*, 3 < 1 <sup>†</sup>
心配な	2.968(1.402)	3.227(1.445)	2.500(1.445)	2.005	.82	<i>n. s.</i>
不安な	3.774(1.283)	3.659(1.275)	3.000(1.351)	2.774 <sup>†</sup>	.89	3 < 1 <sup>†</sup>
いらいらする	3.129(1.360)	2.750(1.587)	2.167(1.204)	3.061 <sup>†</sup>	.91	3 < 1

<sup>†</sup>*p* < .10, \**p* < .05, 平均値と ( ) 内の数値は *SD*

### ③友人から返信が無いことに対する反応と友人関係との関連

KJ法（川喜田，1976）による質的研究の経験のある筆者を含む2名で、返信が無いことが気になり始める時点で想起される自由記述の回答を、KJ法を参考と同じ言葉や類似の意味を持つもので小カテゴリ化し、それらを5つの大カテゴリへとまとめた（表7）。田附ら（2019）ではKJ法を参考にLINEのやりとりで生じる気持ちをカテゴリ分類する際、複数のカテゴリに該当する記述は「複数の気持ち」と命名していた。本研究においても、複数カテゴリにまたがる意味を含む記述があったが、複数にまたがる意味の中から一つを選んでカテゴリに分類することは恣意的な選択になる可能性があり、記述された内容を正確に捉えられなくなると考え、田附ら（2019）を参考に「複数の気持ち」と命名し分類した。カテゴリ分類の妥当性を確認するため、臨床心理学専攻の大学院生2名に独立して評定を求めたところ、一致率は一場面あたり平均が83%であった。一致しなかった項目について筆者らと評定者で協議を行い、最終的に分類を確定した。友人関係群ごとの出現頻度の違いを検討するため $\chi^2$ 乗検定を行った結果、「予定」未読場面で有意差があり、残差分析を行った（ $\chi^2 = 27.987, p < .05$ ）（表8）。「相手への不満」では、快活的内面関係群の出現度数が多く、気遣い・群れ関係群が少なかった。

表7. 送り手条件：「予定」未読場面のカテゴリ分類

大カテゴリ	小カテゴリ	例
相手の状況・様子を考える	相手の状況	「忙しいのかな」「返信を忘れている」「何かあったのか心配」
	相手の気持ち	「乗り気じゃないのかな」「遊びたくないのかな」
被害感・自責の気持ち	面倒と思われている	「絶対未読で見ているのに、めんどくさいと思われているのかな」
	不安になる	「遊びたくないのかなと不安になる」
	嫌われている	「何か嫌われることしたか」
相手への不満	返信がほしい	「決めごとなので早く返信してほしいと思う」 「予定が決まらない状態でもやもやする」
	予定が決まらない	「予定が決まらなくて困る」
気持ちの切り替え	予定がなくなることを考える	「キャンセルになった時のことを考える」
	もう一度送る	「次に送る文章を考える」
	気にしない	「気にしない」「忘れる」
複数の気持ち		「忙しいのかなと思う一方で遊ぶのか面倒くさくなる」 「なんで返信ないのかなと不安になるし、乗り気じゃないのかなともやもやする」

表8. 「予定」未読場面：友人関係群ごとの人数

予定（未読）	友人関係群			合計
	快活的内面関係群	気遣い・群れ関係群	自己閉鎖群	
相手の状況・様子を考える	21	21	15	57
被害感・自責の気持ち	7	11	5	23
相手への不満	14(+)	6(-)	9	29
気持ちの切り替え	2	5	11(+)	18
複数の気持ち	4(-)	19(+)	5	28
合計	48	62	45	155

5%水準で有意に多少が示されたセルを+、-で示す。

「気持ちの切り替え」は、自己閉鎖群の出現度数が多く、「複数の気持ち」は、気遣い・群れ関係群の出現度数が多く、快活的内面関係群は少なかった。その他の場面では有意差はなかった。

### 3-3 受け手条件の検討

友人からメッセージを受け取った際、すぐに返信するかを友人関係3群間で $\chi^2$ 乗検定を行い検討したが有意差はなかった。次に、メッセージを受け取った時点で想起される内容を、送り手条件と同様にカテゴリを作成して分類し、各カテゴリの出現頻度を3群ごとに検討した結果、「相談」場面では有意差があり ( $\chi^2 = 16.722$ ,  $p < .05$ ) (表9、10)、「相手の状況に気持ちを向ける、返信することに対して積極的」で自己閉鎖群が少なかった。「自分のタイミングや気持ちを優先する」は快活的内面関係群が少なく、自己閉鎖群は多かった。

表9. 受け手条件：「相談」場面のカテゴリ分類

大カテゴリ	小カテゴリ	例
相手の状況に気持ちを向ける 返信することに対して積極的	相手の状況・様子を気にする	「相手を心配する、不安なかな」
	相手が悩んでいるので話を聞く 頼られている、力になりたい	「悩んでいるなら早めに聞いたほうが良い」 「頼ってくれているので、時間を取らないと思う」
自分のタイミングや気持ちを優先する	時間があれば／心の準備をしてから 面倒、少し時間を置いてから	「時間があれば聞こう」「後でも大丈夫かな」 「長くなりそうなので、心の準備をしてからのぞみたい」 「面倒くさいので、後で返信しよう」
	返信する、考えることに対して 消極的	「めんどうなので返したくない」 「相談されるのは苦手なので、できることなら返信したくない」
内容への関心	内容が気になる	「単純に気になる」「どんな内容かと思う」 「内容をテキストで送ってほしい」
	その他	「私には直接関係ないかな? ってるな」「おもしろ」
複数の気持ち		「少し面倒くさいけど、話は聞こうと思う」 「相談に上手く乗れるかどうか不安だが、頼られているのなら 返信して相談に乗りたいと考える」

表10. 受け手条件「相談」場面：友人関係群ごとの人数

相談	友人関係群			合計
	快活的内面関係群	気遣い・群れ関係群	自己閉鎖群	
相手の状況に気持ちを向ける 返信することに対して積極的	32	43	19(-)	94
自分のタイミングや気持ちを優先する	2(-)	11	12(+)	25
返信する・考えることに対して消極的	9	6	9	24
内容への関心	3	1	4	8
複数の気持ち	2	2	3	7
合計	48	63	47	158

5%水準で有意に多少が示されたセルを+、-で示す。

## 4 考 察

### 4-1 送り手条件の検討

#### ①返信が無いことが気になり始める時間

友人から返信が無いことが気になり始める時間を検討したところ、恋人について相談する「相談」未読場面で、気遣い・群れ関係群が速い返信を求める反応の割合が多く、メッセージが無いことを気にしない人は少なかった。反対に自己閉鎖群は相手に速い返信を求める人は少なく、返信が無いことが気にならない人の割合が多かった。相談に関するメッセージを相手が未読状態である場合に、気遣い・群れ関係群は返信が欲しい気持ちが高まり、自己閉鎖群は相手を読んでいないとわかっている場合には、返信が無いことは気にならないと推測され、2群の間で未読状態の受け取り方に違いがあると考えられる。快活的内面関係群は、全場面で反応の出現度数の過多に傾向はみられず、場面による返信の速さを気にする傾向に特徴はないと推測される。

#### ②友人からの返信が無いことに対するネガティブ感情

i) 約束している予定を確認する「予定」場面：未読場面では、気遣い・群れ関係群は自己閉鎖群よりも戸惑いやもやもやといったネガティブ感情を抱く傾向に、既読場面では気遣い・群れ関係群が自己閉鎖群より「もやもやする」程度が高かった。他の場面に比べ時間的制約があるため、早い返信を期待すると考えられる予定場面で、気遣い・群れ関係群は友人が未読状態あるいは既読状態で返信が無いことに、漠然とした不安を感じると考えられた。一方の自己閉鎖群は、友人が未読状態や既読をつけて返信が無いことに心配や不安が生じにくい傾向にあり、既読の有無に気持ちを左右されにくいと考えられる。

ii) テスト疲れと遊びたい気持ちを送る「つぶやき」場面：既読場面でのみ、友人関係群の違いがみられた。自己閉鎖群がネガティブ感情を抱きにくいことが示唆され、本群は友人と距離を置いて付き合う傾向にあることから、一方的に送ったメッセージが既読状態で返信が無くても不安や苛立ちを感じる傾向が低いと考えられる。同場面で、快活的内面関係群の「いらいらする」が高い傾向にあり、内面を開示して相手と関係を築く本群は、友人への感情的呼びかけに相手からの情緒的な応答を求めていると推測され、期待した反応が得られないと苛立ちの感情を抱きやすいと考えられる。また、気遣い・群れ関係群が「もやもやする」「戸惑い」が高く、友人からの応答がないことに漠然としたネガティブ感情を感じる傾向が示され、自身のとった行動への不安が喚起されている可能性も推測される。

#### ③友人から返信が無いことに対する反応内容と友人関係との関連

友人関係群ごとに検討した結果、「予定」未読場面で、快活的内面関係群は不満を抱く人が多く、気遣い・群れ関係群は不満を抱く人が少なかった。本場面は時間的制約があるため、快活的内面関係群の友人から反応がないことへの不満は状況的に妥当なものと言えよう。気遣い・群れ関係群は、返信が無い理由を複数想像する人の割合が多く、相手の状況や様子を中心



に事態を捉える傾向の一端がみられた。また、同場面で自己閉鎖群は「気持ちの切り替え」を行う割合が多く、返信が無いことに動揺や傷つきが生じないよう、相手の反応の有無に捉われないようにしているのではないかと考えられる。

## 4-2 受け手条件の検討

### ①返信の速さの特徴

友人関係の持ち方による友人からのメッセージに対する返信の速さへの意識の違いを検討したところ、全場面で関連はなかった。青年後期になると自身が返信できない状況を相手が察してくれると思いきやという指摘から（田附ら，2019，p. 24）、今回の結果にも同様の心性が現れたのではないかと考えられる。

### ②反応内容の特徴

友人からのメッセージを見て想起される内容に友人関係群ごとに違いがあるかを検討した結果、恋愛相談が予期される「相談」場面で有意差がみられた。自己閉鎖群では返信や相談内容を考える人は少なく、自身の思いを中心に対処する人が多い傾向が示された。相談に応じることは本群が回避したい自他の内面に触れることと繋がるため、返信が躊躇われるのではないだろうか。快活的内面関係群では自身の思いを中心に対処する人が少なかったことから、自分本位ではなく、相手の様子や気持ちを押し量りながら返信や対応を考える人が多い傾向にあると推測される。

## 4-3 3群の仮説検証と特徴のまとめ

以下では得られた友人関係3群ごとの特徴について述べる。

### ①気遣い・群れ関係群

送り手条件では、恋人に関する相談が未読状態の場合に、速い返信を期待する傾向が示された。また、「予定」「つぶやき」場面の一部で、相手から返信が無いことに「戸惑い」「もやもやする」といったネガティブ感情を抱きやすい傾向が示唆された。よって、「**仮説1**：気遣い・群れ関係群は、自身がメッセージの送り手の場合、相手から速く返信が無いことを気にし、返信がないことが気になり始める時点でネガティブ感情を抱く。受け手の場合は、返信の速さに気を遣い、速く返信しようとする」は、送り手条件で一部支持された。本群は親しい友人であっても、相手が未読状態の場合では、相手の反応が得られるまで戸惑いやもやもやするネガティブ感情を抱えやすいと考えられる。青年前期は葛藤場面を被害的に受け取るよりも、ただ漠然と戸惑いや不安を抱く傾向にある（田附ら，2019，p. 25）という指摘と類似しており、大学生ではあるものの本群のLINE利用の反応には青年前期の心性をみることができるだろう。また、「予定」未読場面の自由記述反応の傾向から、時間的制約がある中で相手に不満を抱く人は少なく、返信が無い理由を相手の状況や気持ちを中心に複数考える人が多かった。榎本（1999）は、中高生では友人と協調的な関係を持ちたいと思うと同時に、その関係が持てて

いるかを意識することから不安が生じると述べている (p. 66, 68)。従って、友人から返信が無いことについてあれこれと思いを巡らせ、相手の反応に捉われやすいといった青年前期に似た特徴が本群の LINE 上にも表れていると言えるだろう。

## ②自己閉鎖群

本群は、「関係回避群」(岡田, 2011, p. 15) と似た特徴をもつが、本群の方が友人関係から退く傾向にあると考えられた。送り手条件では友人からの返信の有無を気にしない割合が多く、ネガティブ感情も他群に比べて低い傾向にあった。従って「**仮説 2**：関係回避群は、自身がメッセージの送り手でも受け手でも、場面を問わず、返信の速さは気にしない。送り手では、相手から返信が無いことが気になる傾向が低く、ネガティブ感情を感じにくい傾向にある」は一部支持された。送り手の「予定」未読場面の自由記述反応では、友人から返信が無いことに動揺や傷つきが生じないよう、気持ちを切り替えることで相手の反応の有無に捉われないよう対処していると考えられた。また、受け手の「相談」場面の反応では、返信に積極的になる人は少なく、自身の都合や気持ちを優先する人が多かった。つまり、送り手・受け手の両方で、自身の情緒が不安定になるようなやりとりが生じないよう気をつけながら LINE を利用していると考えられる。

## ③快活的内面関係群

本研究では岡田 (2011, p. 15) の「内面関係群」に代わって、友人間の良い雰囲気を持続し、自他ともに傷つかないよう配慮しながら、相手に自身の本音を見せて付き合う快活的内面関係群が見出された。よって「**仮説 3**：内面関係群は、送り手でも受け手でも、時間的制約がある等の状況によって、返信の速さや有無を気にする傾向が変わる。返信が無いことが気になり始める時点で感じるネガティブ感情は、メッセージの文脈により傾向が異なる」の検証は行えなかった。友人との相互理解を求め親密な関係を築く内面関係群に比べると、本群は親しい友人と気の置けるような関係にはないことが推測される。LINE 利用では、送り手・受け手の両方で返信の速さの特徴はみられず、「つぶやき」場面で相手が既読を付けたのに反応がないことに苛立つ傾向が示されたことや、「予定」未読場面では即時的な反応がないことに不満を抱く人が多かったことから、自身が期待するタイミングで相手から返信がないと苛立ちや不満を抱える傾向にあると考えられた。3 群の中では友人に対し自己開示を通して関係を築く群と言えるが、内面の開示は一方的であり相互理解を行う関係の形成には至っていないと考えられ、相互的な友人関係の形成が課題であると考えられる。

## 5 本研究の心理臨床実践への示唆と今後の課題

本研究では、大学生の友人関係の持ち方と LINE のやりとりの特徴との関連を検討した。結果を受けて、心理臨床実践にどのような示唆が可能か考察する。今回の調査で用いた友人関係尺度 (岡田, 2007) の因子分析結果が岡田 (2007) の因子構造とは異なり、「傷つけられることの回避」因子に「自分の内面に踏み込まれないよう気をつける」「友だちの心の支えにな

ろうとする（逆転）」が含まれ（岡田（2007）では「自己閉鎖」因子に該当）、また「友だちから無神経な人間だと思われないように気をつける」（岡田（2007）では「傷つけることの回避」に該当）も含まれた。さらに、「傷つけることの回避」因子に、「相手の世界に口出ししない」「お互いのプライバシーに立ち入らない」等、相手の領域や内面に踏み込まない内容の項目が含まれた（岡田（2007）では「自己閉鎖」因子に該当）。今回、岡田（2007）の調査から15年を経過し、160名の青年を対象に行った因子分析結果からではあるが、以上のような複数の項目移動や因子構造の変化を受け、友人間で互いの考えに意見しあうことが、無神経とされたり、傷つけ、傷つけられると捉えられている可能性が示唆されたと考えられる。土井（2008, p. 16-17）は、「現代の若者たちは、自分の対人レーダーがまちがいに作動しているかどうか、つねに確認しあいながら人間関係を営んでいる」とし、「周囲の人間と衝突することは、彼らにとってきわめて異常な事態であり、相手から反感を買わないようにつねに心がけることが、学校での日々を生き抜く知恵として強く要求されている」と述べ、身近にいる他人の言動に対して敏感となる「優しい関係」を取り結んでいると述べる。今回の調査で得られた因子分析の結果には、現代青年の、互いに傷つけないよう、傷つかないように気を遣い合う友人関係のあり方が現れているとみることもでき、この傾向は、土井（2008, p. 16-17）が「大人たちの目には人間関係が希薄化していると映るかもしれないが、見方を変えれば、かつてよりもはるかに高度で繊細な気配りを伴った人間関係」の特徴に近いものと言えるのではないだろうか。

なお、従来青年期に形成される相互理解を伴う関係を築く「内面関係群」（岡田, 2007）は見出されなかった。代わりに友人間関係の楽しい雰囲気重視しつつ、自身の本音を見せて付き合う「快活的内面関係群」が見出された。近年の青年は友人間で内面を開示する際においても、楽しい雰囲気を維持し重たい雰囲気にならないよう配慮しながら自己開示しようとする傾向にあるのではないかと考えられる。

また、本研究で得られた3群のLINE上での反応には、各々の友人関係の特徴が顕著に表れていると考えられ、特に青年前期に似た傾向を持つ気遣い・群れ関係群は、LINE上でも相手の反応を気にしていることが窺え、心労を抱えながら友人関係を維持していると推察された。教育相談や学生相談等の青年を対象とした心理臨床場面では、友人関係に関する悩みも一定の割合を占めると考えられるが、本研究の結果を踏まえ、LINEを通じた友人間でのコミュニケーション上で発生する気持ちや感情について、彼らの友人との付き合い方と照らしながら考えることが重要であろう。青年期における友人関係の発達的变化に個人差があることを考慮しつつ、現代青年がLINEをはじめとするSNSで友人と交流する中でどのように心を遣い、苦しみを抱えているのか、青年に関わる教師や支援者、保護者を対象とした心理教育においても、今回得られた知見を活用していけるのではないかと考えられる。なお、人数比の関係で今回かなわなかった性差の検討については今後の課題である。

## 引用文献

- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. 教育心理学研究, 47 (2), 66-68.
- 加藤尚吾・加藤由樹・小澤康幸・宇宿公紀 (2019). LINE のグループトークで返信を待つ間にネガティブ感情を生じる人とは?—LINE 依存度に関する三つの下位尺度の得点による比較—. 日本化学教育学会年会論文集, 42, 571-572.
- 加藤尚吾・加藤由樹 (2020). LINE のグループトークにおけるネガティブ感情の発生のタイミング: LINE の「友だち」及び「グループ」の数との関係. AI 時代の教育論文誌, 第 2 巻, 1-6.
- 川喜田二郎 (1976). 発想法 創造性開発のために. 中央公論新社.
- 小島弥生 (2016). LINE での友人関係の形成および維持への意思に賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が及ぼす影響. 埼玉学園大学紀要, 16, 53-64.
- 中山満子 (2018). 高校生の友人関係と SNS 利用に伴うネガティブ経験. 科学・技術研究, 7(2), 127-132.
- 西村洋一 (2020). 大学生の友人関係における LINE の利用—自己開示の深さ及び効用認知に注目して—, 聖学院大学論集, 127-141.
- 岡田努 (2007). 大学生における友人関係の類型と, 適応及び自己の諸側面の発達の関連について. パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 岡田努 (2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について. パーソナリティ研究, 20, 11-20.
- 小塩真司 (2017). SPSS と Amos による心理・調査データ解析 [第 2 版] 因子分析・共分散構造まで. 東京図書株式会社, 138-141.
- 須藤春佳 (2019). 女子大学生の友人関係と SNS コミュニケーションの特徴—気遣いと心理的居場所感に着目して—. 神戸女学院大学論集, 第66巻第 2 号, 63-77.
- 田附紘平・松波美里・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・柴田彩花・松井祥可・桑原知子 (2019). LINE の既読をめぐる葛藤場面における青年の心理の特徴. 心理臨床学研究, 37(1), 16-28.
- 時岡良太・佐藤映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里・岩井有香・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・岩城晶子・神代末人・桑原知子 (2017). 高校生の LINE でのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響. パーソナリティ研究, 26(1), 76-88.
- 若本純子 (2015). 児童生徒の LINE コミュニケーションをめぐるトラブルの実態と関連要因 小学生・中学生・高校生を対象とする質問紙調査から. 佐賀大学教育実践研究, 33, 1-16.

(原稿受理日 2024年 3 月15日)